

# 団塊の世代後のゴルフ市場はどうか？

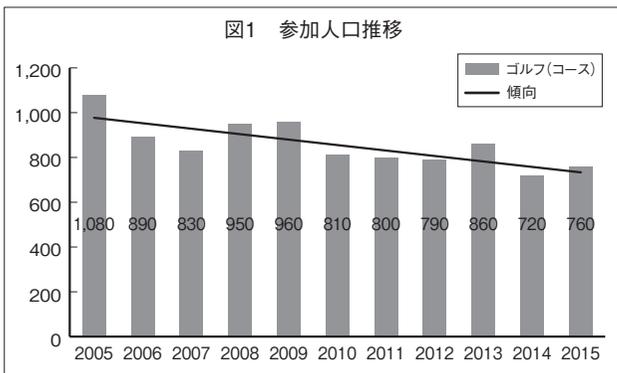
## コーホート分析は高齢者のゴルフリタイアを明示

レジャー白書2016から、ゴルフに関するデータを抽出して、まとめてみた。人口は、市場規模を決定する大きな要因であり、少子高齢化の動きと人口減が、ゴルフ市場マーケットをどう変化させるのか気になるところだ。今回は世代の動きに注目してみた。一般的に10年から15、16年の期間で、時代を象徴する言葉で世代が括られてきた。「団塊の世代」の次は「シラケ世代」。そして「新人類世代」、「バブル世代」、「団塊の世代ジュニア（氷河期、ロスジェネ）世代」、そして「ゆとり世代」と続いてきた。それぞれの世代で消費性向も違う。最も注目される世代は、人口が最も多い団塊の世代だが、彼らは60代後半の年齢層となり、ゴルフからリタイアしようとしている。10年単位での人口の動きを見る中で、男女のそれぞれの動きについても新しい発見があった。

### ゴルフ人口減少を止めるには発想の転換が必要

ゴルフ人口の動きを直近の10年間で見るために2005年からのデータをまとめた（図1）。2015年は760万人と、前年の調

査より40万人、5・6%増えた。しかし、図の傾向線が示すように、年によって増減はあるものの、右肩下がりであるゴルフ人口（コース）は減少を続けている。少子高齢化と人口減少という背景があるだけに、今までは違う対策を打たない限り、ひたすらゴルフ人口は減少を続けることになる。対策は、過去の「ゴルフ（場）」はかくあるべき」という発想を捨てて、「アメリカやヨーロッパで起きている新しいゴルフという捉え方を、日本



もしなくてはいけない。

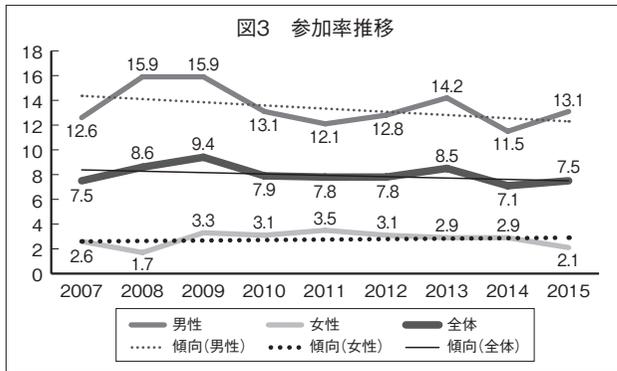
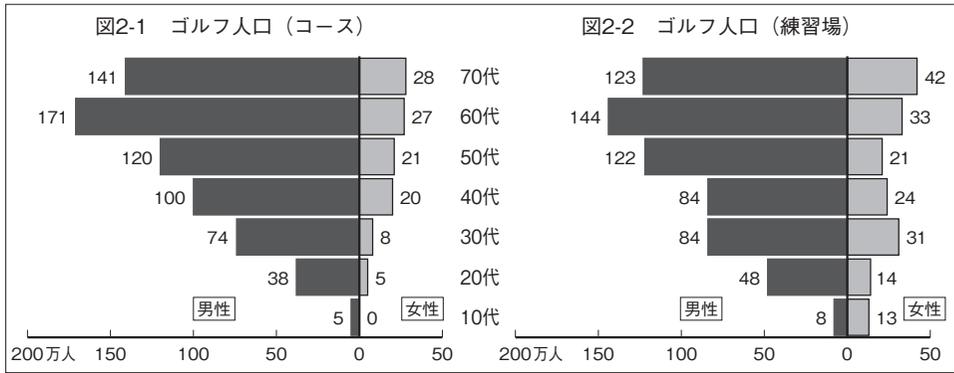
今のままでは、この図にあるように減少を止めることはできない。そして、現状認識をしっかりと持つために、分析は欠かせない。

ゴルフに限らず、スポーツ人口問題の大きなテーマは、高齢化であり、若年層でのプレー人口層の薄さだ。図2は、男女別の年齢層別のゴルフ人口ピラミッド図だ。問題は一目瞭然。最も多い年齢層が60歳代で、ここに最大のゴルフ人口を抱える団塊の世代が属している。団塊の世代を引つ張ったのは戦前・戦中派のゴルファーで、彼らは70歳以上になるが、日本で二番目にゴルファーが多い世代でもある。いずれにしてもこの60歳以上の世代で日本のゴルフ人口の4割強を占める。重要な実需層だが、近い将来喪失する需要でもある。できるだけ長くゴルフを続けられるよう彼らのニーズをつかみ環境を整備する必要もある。

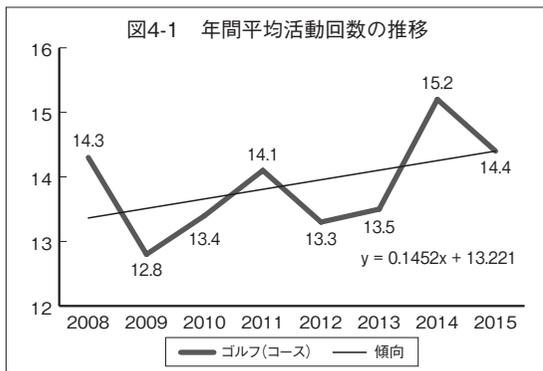
もちろん、この4割を超える需要の喪失を補完する新たな需要の創造という点で、女性と若年層でのゴルフ人口拡大のための対策は、これも不可欠ということになる。

次に、男女別の参加率について

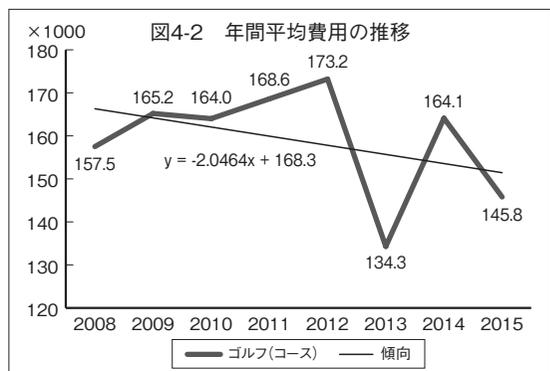
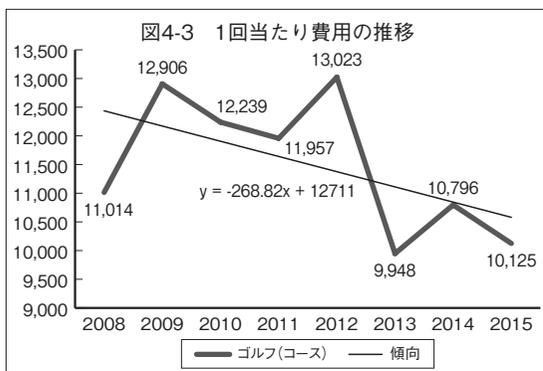
見ると、図3の男性は、右肩下がり参加率が大きく落ち込んできていることが分かる。男性が9割近くを占めている現状では、男性



の参加率の低下はゴルフ参加率の低下という結果になる。そこでマーケティング的にもリスクヘッジするためには女性、ゴルフアワーを増やす対策が必要になるが、女性の参加率は、わずかながら増加傾向で推移しており、具体的な取り組みが求められるところだ。これは、ゴルフ市場活性化委員会(GMAC)でも報告されているが、ゴルフとスウィーツといった「プラス」の企画効果が言われており、女性の琴線に触れる企画と



仕掛けが大事ということのようだ。**市場規模縮小をどう止めるか** レジャー白書では費用についても報告されているが、これと平均活動回数の関係は逆の相関関係にある(図4-1~3)。平均活動回数は、増加傾向を示し、年間の平均費用額は減少傾向にある。当然、1回当たりの費用も減少傾向となるが、一般社団法人日本ゴルフ場経営者協会(NGK)から発表されるゴルフ場入場者数が8800万人前後を維持できている理由には、プレー料金の



億円と推計されている(図5)。

## ゴルフは70代で半数がリタイアという現実

団塊の世代のリタイアがゴルフマーケットとしては最大の関心事であることは間違いない。世代で動きが違うのか？ 今回、レジャー白書を発行している公益財団法人日本生産性本部の協力を得て、ゴルフ人口を年齢層別に分けて、10年前の10歳刻みのゴルフ人口が

なっていたかを分析した。これはコーホート分析といわれる手法で、同じ世代の消費性向やし好性などを分析する方法としてよく使われている。

表1は、10歳刻みの世代別ゴルフ人口を全体と男性、女性別に整理したものだ。上段の2006年の人口が10年たった2015年ではすぐ下の下段の人口になっている。図と合わせて説明すると、表1の参加人口全体の2006年60歳代は340万人だったのが、2015年には70歳代以上となり、すぐ下の数字、169万人へとほぼ半減している。実は、人数では団塊の世代より戦前・戦中派のゴ

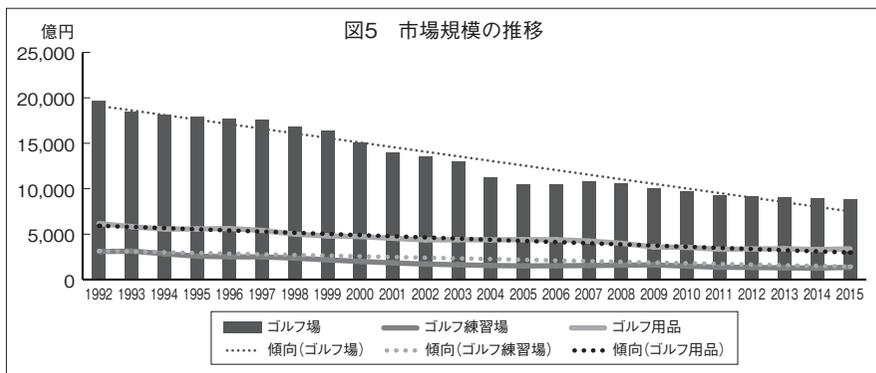


図5 市場規模の推移

低価格化がある。白書のデータもこのことを示している。市場規模の維持は低価格・プレー回数が増加という構図が見えてくる。なお、ゴルフ場の市場規模は、前年より110億円少なくなり、8780

ルフアーの方が多かった。レジャー白書のこの先輩ゴルファーの数字で見ると、70歳を過ぎるとゴルフからのリタイアは確実に起こる。それも2人に1人という高い確率でゴルフを止めている。

図6-1では、ゴルファー全体の年齢層別人口の変化が良く読み取れる。若年層では10年前の10代が20代になりゴルフを始めており、20代は30代になり人口を増やしている。しかし、30代は40代となることで人口を減らし、40代は若干だが50代へと年をとることで人口を減らしている。10年前の50代は逆にわずかだが人口を増やし、60代は70代に入り半減したというのがこの10年の年齢層別の動きだ。

では、男女別では差があるのだろうか。男女でははつきりとした差が表れていた。

男性は、ゴルフ人口の絶対数が多いことから全体と同じような動きになる(図6-2)。特徴的な動きは、30代から40代になることでこの世代の人口が4割ほど減少している。そして60代から70代になることで5割以上がゴルフから離れている。

厚生労働省をはじめとした政府

機関が、健康保険財政と社会保障制度の維持から、健康年齢を高めることに注力しているが、この平均寿命に対して健康年齢を延ばすという取り組みでは、ゴルフの効用も言われており、70歳代以上のゴルファーのリタイアを防ぐことが、国民の健康維持・増進につながるということになる。

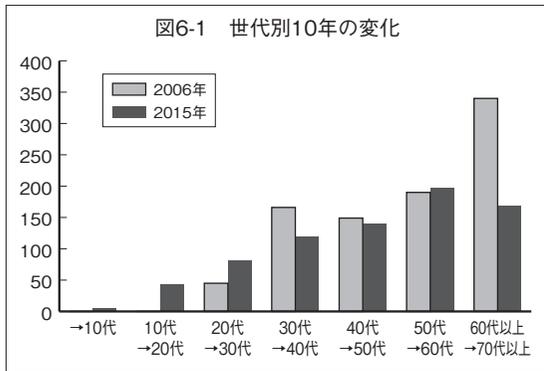
では女性はどうと、20代から30代になる時期に人口が減少する(図6-3)。これは子育て世代でもあり、ゴルフ場でゴルフを楽しむ人に強い制約がかかっている結果と言える。実はゴルフ練習場でのこの世代の女性ゴルフ人口はゴルフコースの人口を上回り、様相を違える。この世代の女性をゴルフ場に呼ぼうと策を弄するが、あまり大きな効果は得られていない。子育ての合間にゴルフを楽しむにはゴルフ場は時間的な拘束が強いのもかもしれない。この世代の女性をターゲットにするためには時間の拘束を解いてあげる対策が必要になる。

子育てから手が離れかける40代になるとゴルフ人口が大きく増える。30代では4万人だったが、40代になることで20万人へと5倍に

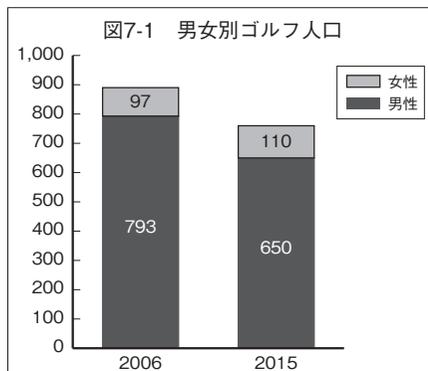
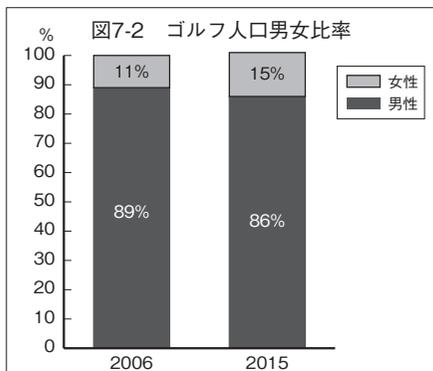
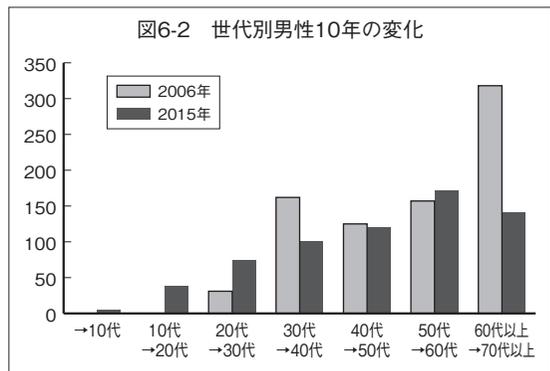
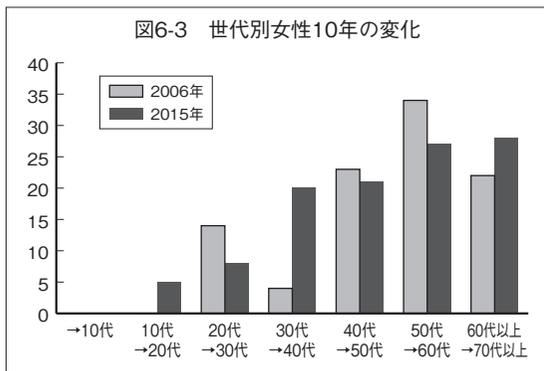
表1 コーホート分析(性別・世代別参加人口 単位：万人)

	参加人口	→10代	10代→20代	20代→30代	30代→40代	40代→50代	50代→60代	60代以上→70代以上
2006	890	0	0	45	166	149	190	340
2015	760	5	43	82	120	141	198	169
	男性計	→10代	10代→20代	20代→30代	30代→40代	40代→50代	50代→60代	60代以上→70代以上
2006	793	0	0	31	162	125	157	318
2015	650	5	38	74	100	120	171	141
	女性計	→10代	10代→20代	20代→30代	30代→40代	40代→50代	50代→60代	60代以上→70代以上
2006	97	0	0	14	4	23	34	22
2015	110	0	5	8	20	21	27	28

増える。40代が50代へと移る中で若干減少する。50代が60代になることで2割ほど減っていた。この40〜50代が50〜60代へと年を重ねる時期にゴルフ人口が減る点は、業界としても研究する必要がある。



人口が多いだけに、高齢化の中で人口を維持する上で重要になるはずだ。さて、60代が70代以上になることでゴルフ人口が3割近く増えて女性としては最大人口を抱える年齢層となる。健康を考えても、中高年齢層でのゴルフプレーの維持、リタイアの防止は国民生活から大事、ということになる。最後に、ゴルフ人口の減少の大きな部分は男性ゴルフアーのリアで、女性ゴルフアーは確実に増えており、ゴルフ人口全体に占める比率も高くなっているという



のが、図7-1、2だ。全体の人口を増やすと同時に、女性ゴルフアーを増加させるゴルフ場をはじめとした業界の取り組みをさらに強化してほしい。